紙 碑

（「歴史人類」第９号，1980年より転載）

菊地利夫先生と歴史地理学会

昨年10月30日，本会名誉会員菊地利夫先生が逝去されました。95才でした。

歴史地理学会を作られたのは菊地先生でした。一つの学会を立ち上げられ軌道に乗せられるまでの御苦労はたいへんなものだったと思います。既にできている学会を運営するのとはおおちがいだと存じます。本稿は当時の事情を知っている方が書かれるとよいのですが，中田榮一先生，山嵜謹哉先生等既に故人になられ，誰もいないということで私がお引受けしたわけですが，私が入会したのは第１回大会（1958年，於・日本大学）の際で既に学会は成立しており，準備段階の事は知る由もなく，本会50周年記念誌にのった菊地先生御自身の回想記，それに中田・山嵜両先生の文も参考にして書くほかはありません。

会則の原案作成，入会見込者の選定，趣意書や入会依頼状の作成発送等，すべて菊地先生が御自宅でなさいました。奥様の御協力もあったとのことです。当時のこととてヤスリ

に原紙を当て鉄筆で入念に書き，謄写版機で１枚１枚印刷したものです。

当時の日本地理学会には歴史地理学会に批判的な人が少くなく，やりにくかったとのことです。その人達の考えを推測するに①その学問の専門的全国学会は一つでよい。日本地理学会だけで充分だ。特に理学部系の学界に一学問一学会の傾向が強かったようです。②地理学は現在の事象を対象とする学問だ。過去のことを研究するのは歴史学，歴史時代の研究は歴史学者に任せておけばよい。この考えでは学会以前に歴史地理学の存在も認めないわけです。かくて「地理学の学会ではない」とか「破壊活動」だという人が出てきたのです。以上のことは菊地先生のほか中田先生も書いておられます。

先生の研究の主体が新田開発だということは衆知の通りです。対象地域は全国的であり，開発過程や農業経営の方面に重点をおかれました。その点，集落景観を重視された矢島仁吉先生の新田研究とは対照的でした。

新田研究以外の面では先ず方法論があります。少壮の頃は生態学に関心をもたれ，地理学研究にヒントを得ようとされていました。50周年の記念誌にのせられた回想文の文末に晩年のお考えを述べておられます。

千葉大学に永く勤務されたこともあり，千葉県については多方面に検討を加えられ，著書『房総半島』を出されました。諸学会の千葉県を対象とする巡検案内も何度も引き受けられ，私も参加したことがあります。千葉大の学生を対象とした県内の巡検をよくやられた由，学生として参加した青木栄一先生が50周年記念誌に書いておられます。

歴史地理学会より早く日本地理教育学会がスタートしていました。初代会長は内田寛一先生です。内田先生の門下生が多数参加しました。内田先生は歴史地理学のパイオニアでしたから門下生は歴史地理学研究者が多く，同会の機関誌「新地理」には地理教育の論文のほか歴史地理学関係の論文が多くのりました。菊地先生もその一人としてよく書かれていました。内田先生の本務校は菊地先生の母校東京文理科大学（今の筑波大学の前身）でしたのでそこの卒業生が多かったのですが，日本大学にも関係されたので日大出身の方も少くありませんせんでした。また駒澤大学の講師もされ，私は駒澤大学で内田先生に習いました。菊地先生と私とは出身校が違うので同窓ではありませんが同じ先生の教えを受けた同門です。同門の後輩として菊地先生に目を掛けて頂きお世話になりました。

歴史地理学会には当初，会長の制度がなく初代常任委員長として菊地先生が会を代表しておられました。やがて会長の制度がおかれ，初代会長として浅香幸雄先生（当時東京教育大学教授）が就任され，次いで藤岡謙二郎先生（当時京都大学教授）が２代会長，米倉二郎先生（当時広島大学教授）が３代会長になられ，その後菊地先生が４代会長になられました。

学会の事務局は中田榮一先生を中心とした立教大学の期間が長く，中田先生が定年退職されてからは専修大学に移り，山嵜謹哉先生がお世話なさいました。立教大学へも専修大学へもよく行きました。４月に山嵜先生がなくなられ，10月に菊地先生が逝去され，さびしくなりました。両先生のご冥福を祈る次第です。

（中島義一）